



楊陽花穂集

八七巻

ル 4
1532
4



1582

撰端居穂集 卷十七



- 一 物産同銘文一書
- 一 每季の御事取附一書
- 一 甚之指津免一書
- 一 古の神一書
- 一 西の人一書
- 一 秘言古澤園一書
- 一 絶行一書

明治四十九年九月
朝倉篁三

- 一 高麗橋女歌対々事
- 一 珍表津仕生々事
- 一 諸国中力たれ々事

抄瑞房物集 卷七のまじ



抄瑞房銘文々事

内ハ宛永正五年丁卯瑞房持持宗眼倍美多ハ心寺
 任職天宮和尙津持以在成中申付和尙とリハ
 新田家の文流一々事四津中津の言子御も
 出物と云々御の言御も一々事一は行運
 長久の法行一々事一は行運
 并ニ方圓一々事一は行運
 修行一々事一は行運

河漢人福乃由中五子事子為重人

提州大政剛中鐘銘

是歲甲戌之秋以

源左大臣鈞命被蠲當地市鄧永
代飲祖是天下寬裕之基也人皆
抃野展喜悅眉故依衆許使
身氏新鑄鵠鐘無曙雲橫東
嶺朝撞之祝延

皇帝萬歲皎月懸西山夕鼓擊之
祈誓賢君子期古亦有慶餘則
勤金石銘彝鼎而歡為大平道
兵蓋支無貴無賤聽鐘聲者
忽降睡魔速破群疑也

銘金鍊玉

不費鉅錢

華鯨形化

晨昏報反

將軍大樹

風不鳴枝

國家父母

萬民蒙慈

仁者有男

大明無私

清平世界

永護丹墀

二百八聲御言

通天神地祇

却石有消日

洪音無盡時

寛永十閏逢閏長季秋日

治工藤原家次

願主大坂結衆等

野釋龍巖叟書

右持権成徳法皇一後持の御孫孫の御代に
建く三万惣年云云此持持廣新御勅の言ハハ
存存女々く礼法を以て急々之ハ西津唐洲
東津唐洲の西津唐洲と云々今之を以て
海一に享保九年一十年の敷積の言
高津唐洲
の言相前御持持持持の言を留め
河唐洲く出勅の言を以て
持持と云云公云云
三万同家臣女々々々切の言を以て

是地より領土毎十年其河人清れし
此の地を治めしむるは其の地を治めしむる
けしむるは其の地を治めしむるは其の地を治めしむる
けしむるは其の地を治めしむるは其の地を治めしむる
けしむるは其の地を治めしむるは其の地を治めしむる
けしむるは其の地を治めしむるは其の地を治めしむる
けしむるは其の地を治めしむるは其の地を治めしむる
けしむるは其の地を治めしむるは其の地を治めしむる
けしむるは其の地を治めしむるは其の地を治めしむる
けしむるは其の地を治めしむるは其の地を治めしむる

小畑 五十石の石を指す斗計年余

南畑 三十石の石を指す斗計年余

天清畑 五十石の石を指す斗計年余

合さるる斗計年余の石を指す斗計年余
石高の石を指す斗計年余

毎年斗計年余の石を指す斗計年余

并、献上物

公方様

紙編酒
白紗綾

十五毫
十五毫

軟上

御老所

西御方

御新様

御老所御方

御老所御方

寺社御方

大御方

御新様御方

白紗綾二巻

白紗綾

白紗綾

白紗綾二巻

白紗綾

御新様御方

御新様御方

白紗綾

白紗綾

御新様御方

御新様御方

御新様御方

御新様御方

右御上物進上御新様

御新様御方

御新様御方

御新様御方

御新様御方

御新様御方

天海組 一ツ分 牛車馬車分

右御救免に右割と相入申上り申上り申上り申上り
元遠留申上り法に用入九二ツ割に船乗込山組ハ
毎年下向南組天海組ハ格年下向五ツ割七ツ割
元々山組法に用入天海組車組も入と九割合
元々是より法に用入の格に長に越し申上り申上り
明和四年手改め三ツ分なる

山組 四ツ分格に格入八割申上り

車組 四ツ分格に格入三ツ分八合

天海組 四ツ分格に格入三ツ分一合

合上り方と若くは格入と申上り申上り

法古三方没高凡とて方没とお入申上り

山組 四ツ分格に格入

南組 三ツ分格に格入

天海組 三ツ分格に格入

右御救免に右割と相入申上り申上り申上り申上り
山組と四格入人南組と格入人天海組ハ又出立も
申上り自と割時ハ山組と格入申上り申上り申上り
天海組と格入申上り申上り申上り申上り

器(器)

明和五年丁亥二月没高野方八百余石

北組 八百石没余事地九千石没余

天邊組 二千七百石没

之没方凡千七百七拾石没

北組 四百石没余

南組 七百石没余

天法 五百石没余

勅没高野方九千石没

此元禄元年事高野川曰去年堤は高野川

古川 高野川永年丁酉指高野川 延享五年

高野川北九河南尾所建高野川没年没

指高野川高野川没年没

川内川所土産茶之なる川内川茶葉のなる

表地他物も没方高野川高野川没年没

高野川の地と高野川没年没

高野川の没方高野川没年没

高野川の没方高野川没年没

高野川の没方高野川没年没

高野川の没方高野川没年没

自家の由りてり申す候も、
為免候事多き申す候も、
今の由候事、
二方所申す、
相考忍れやうと申すは、

吉田清見の事

明暦元年春、
この寛文元年、
増の九箇年、

竹中義直の孫、
長江の事、
谷岡の事、
の役、
役、
板、
江、
世、
今、
美濃守

しら神事

寛文の... 神事... 寛文の... 神事... 寛文の... 神事...

しら神事

しら神事... 寛文の... 神事... 寛文の... 神事...

しら神事

寛文の... 神事... 寛文の... 神事... 寛文の... 神事...

しら神事

しら神事

寛文の... 神事... 寛文の... 神事... 寛文の... 神事...

しら神事

寛文の... 神事... 寛文の... 神事... 寛文の... 神事...

寛文の... 神事... 寛文の... 神事... 寛文の... 神事...

坂東向加賀の三浦信成

右

安永の御書
年一十一

安永

壬子年八月廿二日
死

はての御書
年二十九

西宮町榎屋台の信成
申元古たつり家

壬子年八月廿二日

安永の御書
年一十一

安永

信成の御書
年一十一

信成

形州増田邑信成の信成
沼津信成

信成の御書
年一十一

壬子年八月廿二日

年一十一

信成の御書
年一十一

信成の御書
年一十一

信成の御書
年一十一

信成の御書
年一十一

信成の御書
年一十一

神心之在力所
ほてり事なき

け有る古殿方等し又妙法に極むるを
問はずもく文くもなき事自世間合十人言
しそん科よふつゝ撰つぬゆふのや

秘言古法海理の事

宝永四年丁未生家の行方あかき秘言古法
理書乃の義海集なるもの也秘言古法海理集
海理集の始なり

絶行集の事

正徳四年丁未年秋の穀雨出付年と名付
著行集月日海和尚と名付用とを勧進し
河津院此初光寺とあかき多分宮筋へ白糸
成合う絶行絶集はしむ。大絶行集は
ら捨つる人あかき絶行絶集はしむ。大絶行集は
追くる家方絶行絶集はしむ。大絶行集は
出りてり絶行絶集はしむ。大絶行集は
あかき絶行絶集はしむ。

三好康高の御書

三好康高の御書
大坂の御書
池田軍治

池田軍治

大坂の御書
池田軍治
三好康高の御書
大坂の御書
池田軍治

三好康高の御書

池田軍治

池田軍治

池田軍治
三好康高の御書
池田軍治
三好康高の御書
池田軍治

池田軍治
三好康高の御書
池田軍治
三好康高の御書
池田軍治

○あつたはるるをいふに
つたはるるをいふに
つたはるるをいふに

つたはるるをいふに

享保七年十一月庚辰
享保七年十一月庚辰
享保七年十一月庚辰

諸国定入云云

享保七年十一月庚辰
享保七年十一月庚辰

飢荒に際し
飢荒に際し
飢荒に際し

一今年西國
一今年西國
一今年西國

今乃不吉城門の移りもて成る旨の事
 七百姓の事
 一 船の食物を大に奪つて没入海に頼る
 事
 大に騒ぐ所を船合を救う事
 事
 事
 事
 事

二月

根陽落穂集 才ハの巻

- 一 大坂大火の事
- 一 山の崩れ五人切の事
- 一 福地村杭の事
- 一 日守寺の事
- 一 俄の事
- 一 梅田大詰の事
- 一 瀬波の事
- 一 女婦棍の事

- 一 穿杖持之事
- 一 鈿進桐横十口長之事
- 一 夜影の世十口長之事
- 一 二口火津之事
- 一 没者津壙古靴之事
- 一 津用金之事

播磨落穂集 卷八の巻

古坂大火之事

享保九年正月亦。年別古坂浦に橋を三丁目

今も古坂のや今も古坂の妙なり出火

口より船津火古坂並に古坂火

古坂三反同敷古坂音所

内器半一焼矢

古坂音所

古坂敷古坂古坂

古坂古坂古坂

一 竈救亡之或百九拾五

古板四寸七寸九寸

一 土藏 千九十七寸

古板七寸七寸九寸

一 溪納家 千五拾五

古板五寸七寸九寸

一 橋教 五拾三寸

内七寸所 御之儀橋又置宗田

新波橋

古波橋

古神橋

古板橋

中開橋

流橋

日中橋

一 西中親寺 津村河坊希 長心寺 法堂

廿内之七寸八寸 燈火

一 向家乃場

百七寸

一 停坊 廣光院 家浦

寺之

一 神社

八寸

一 寺

廿七寸

一 糸橋 寺乃千七寸

一 麦 八千而八拾石余

一 古良 寺乃千九寸

古良寺乃千九寸 寺乃千九寸 寺乃千九寸

一 糸指之方石余七并大各標方沖尾浦之燒矢

一 燒矢人七五百人七燒矢之形也

一 燒矢 或丈

内一丈ハ 杉平遠江守標 上板屋段

沖便象来ハ人燒矢

一 御城沖酒井護役守集沙下象浦 上糸

沙門沖

一 日沙象沖 或形也

一 尾津中納言標 沖尾浦 上糸

一 尾津中納言標 沖尾浦 上糸

一 沖大各標方所尾標希之形也

上糸

杉平遠江守及 上中ノ所 杉平上板屋段 上板屋段

杉平遠江守及 上中ノ所 杉平遠江守及 上中ノ所

杉平丹治守及 上中ノ所 杉平丹治守及 上中ノ所

杉平太守守及 上中ノ所 杉平太守守及 上中ノ所

杉平遠江守及 上中ノ所 杉平遠江守及 上中ノ所

中川内務守及 上中ノ所 中川内務守及 上中ノ所

海辺内務守及 上中ノ所 海辺内務守及 上中ノ所

上中ノ所 杉平遠江守及 上中ノ所

土名 世尊寺度 申尾河 泉對寺字度 五浦寺丁目
長瀬寺字度 五浦寺丁目 石川園寺度 五浦寺丁目
清野寺字度 五浦寺丁目 石川園寺度 五浦寺丁目
少塚寺字度 五浦寺丁目 清野寺字度 五浦寺丁目
池田内宿度 五浦寺丁目 山崎寺度 五浦寺丁目
阿田宿度 五浦寺丁目 杉本寺度 五浦寺丁目
五浦寺字度 五浦寺丁目 五浦寺丁目
一 清棟番杉本寺度 五浦寺丁目 五浦寺丁目
一 月清寺字度 五浦寺丁目 五浦寺丁目
一 阿田宿寺字度 五浦寺丁目 五浦寺丁目

杉本 五浦寺字度
杉本 源寺字度

一月清寺字度 五浦寺丁目

伴川清寺例寺内宿度あり
西側寺名宿度あり 五浦寺丁目

一月心河 七宿新 五浦寺丁目

一月心河 五浦寺丁目

一月心河 五浦寺丁目

但し宿寺宿あり 五浦寺丁目
お蔵今と杉本河と五浦寺のあり 五浦寺丁目

一川流津村木茂茂之木茂

一津代官屋敷 久下屋敷

一三上物屋敷 兼之忠代店茂

一三上書問屋敷 兼之忠代店茂

法没人居屋敷

一津波根津家所様 雷田又下及屋敷

一日 子下及屋敷

一津浪津家所 元田老屋敷

一津家所 兼之忠代店茂

一日 兼之忠代店茂

一御膳所津家所 石野上及屋敷

一日 兼之忠代店茂

一御藏津家所 片井屋敷

一日 兼之忠代店茂

一御先船 指之艘

一上船 十艘

一桑船 三艘

一土船 三艘

一三上書問屋敷 兼之忠代店茂

穴藏多々火入今有共改也

一二に抄の斗を指す人

川湯物にまじりて 直筆抄の指す新抄

一乃新抄を指す也

美大夫産 津川百多産 嵐二高産

出の産 竹田産

丹波産 柿山産 梅後産

一傾疎則 而也

大名書外津川産は多くは新抄に記す

山本物材の産は多くは新抄に記す

長和と云く飛大の望を昇り

御疎代酒井澄成の撰より二百年前と云

抄の由来は新抄に記す

新抄の由来は新抄に記す

少の新抄の切書

之文武に記すの七のりる新抄其の二の目

抄の由来は新抄に記す

抄の由来は新抄に記す

抄の由来は新抄に記す

十三年六月廿七日

右指澤神社之月事高志事

波切敷人

大和屋 重吉

日守屋 一七

日守屋 一七

日守屋 一七

日守屋 有吉

日守屋

日守屋

右切敷人 既に決り候なり

宇孫家 伴甲田 公方

入官千五

御心 御心

御心

右指澤神社之月事

大和屋 重吉

日守屋 一七

日守屋 一七

日守屋 一七

二月

錦城持粒之事

元文五年庚申四月十日
上野守酒井推楽次
とのち御城付と御名高付より江城の
と御名高付御名高付

寛文二年七月十日
播磨守酒井推楽次
御名高付御名高付
御名高付御名高付
御名高付御名高付

日辛辰人相書

寛文二年十月十日
播磨守酒井推楽次
御名高付御名高付

御名高付御名高付

一 廿五日人相書

少神下らるる御名高付

一 廿九日人相書

御名高付御名高付

一 月十日人相書

一 廿五日人相書

一 廿九日人相書

一目中細

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 服名 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

一 魚おもき

まはりのしんをのえはるるのり
美濃の流を脈をお知らるる

寛政十一年

右の御座候 江戸後徳川幕府の御用印に留め置

寛政十一年十月

周防

寛政十一年

備前

俄の事

寛政十一年壬申冬の比流社に於ては南守松

俄と云ふは... 流り... 此の... 頃... 梅田

梅田ち流るる事

寛政十一年... 丙子...

寛政十一年

- 大地震 五拾年
- 大火事 廿三年

飢饉餓死 二拾五年

万世令人信喜大は中法宗和尚方お拓ち法事
僧のあつて

僧法の九米の事

日年さうり十日ち恒僧法の九米しあつて田た
かゝ火あがくあつて僧法の九米しあつて田た
とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
群集しあつてあつてあつてあつてあつてあつて
後世や後人のあつてあつてあつてあつてあつてあつて

りてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
しあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
ちあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
くあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

女婦振

日の秋のひあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
生質ちあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
法師のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
勢徳りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

たすかんとせぬ。そまきくは船をとりはせしるのまじな
中絶しつゝの敷十の夜たんとせしめぬ

二のくまの清の事

を海にのりて月津津は井とて田舎に
いゝかきまじりぬとちほひよの町に
をうまじりぬとちほひよの町に
いゝかきまじりぬとちほひよの町に
火のえ指ちりてらまよとせしめぬ

没者津津を敵の事

りつゝの門は橋をたてしむるに

仲りのり津津を敵とせしむるに

中山文七 中村末也 二橋ちよ命 市の内屋

杉山とて命 漆川けき 高川まき 切津まき

之津とて命 中川まき 市川まき 山崎とて命

長井中とて命 長井まき 長井まき 長井まき

入るゝ梁とて命 入るゝ梁とて命 入るゝ梁とて命

人あひな 人あひな 人あひな 人あひな

世話とて命 世話とて命 世話とて命 世話とて命

中山新の命 榊とて命 竹中とて命 切津とて命

山下又とて命

神楽の儀へ旗子附りつゝも中形へ
 中村重幸 山ノ金化 瓦書
 山下重幸 小作
 名々書留酒よりあつて〜公福か〜
 中村重幸の紙等ら〜ちりし〜

浄用金事

日年十月に書りし浄用金取寄の標は
 所詮味没少額に支標は書留付浄用金
 目録に上りし人々も別ち標浄用金の書留

能事字様由之令りて同三月十日
 ありし同人の書留は浄用金を

浄用金五百兩宛

| | | | |
|-------|----|----|---|
| 活北信書 | 日 | 書 | 加 |
| 和歌山海書 | 三井 | 公書 | 珠 |
| 浪高の書 | 布 | 重 | 平 |
| 沖 | 重 | 書 | 書 |
| ノ上人 | | | |

浄用金取寄事

活北信書 川海書 活北信書

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金
ノ十人

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金

御用金 二百五十兩

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金
ノ十人

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金

御用金 二百五十兩

御用金 二百五十兩

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金
ノ十人

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金

御用金 二百五十兩
加賀の御用金
千石の御用金

御用金 二百五十兩



